# 出水市立蕨島小学校　実践報告（実践校４年目）

1　はじめに　　※　紙面の関係上，昨年度までと同じ部分は省略。

本校は，１年生２名，２年生２名，３年生３名，４年生３名，５年生２名，６年生４名の合計 16 名の３学級である。極小規模校である。少人数であることから，目の行き届いた指導ができる。各教科等の指導や作文指導など，一人一人丁寧に行うことができることから，キャッチフレーズを「一人一人が光り輝く蕨っ子」と設定し，教育活動に取り組んでいる。NIE 教育の実践がどうすれば効果的に学力の向上につながるかを学校・学級単位で考えている。4 年目は，異学年で取り組む NIE タイムをはじめ，全校で取り組みながら個々の学力向上に向けて研究を進めた。

2　研究主題について

（1）研究主題

学力向上を図る効果的な NIE の在り方と来年度以降の展望

～NIE 実践校 4 年間の取組をカリキュラムに位置付ける～

（2）主題設定の理由

ア　今日的課題から

イ　子どもの実態から

ウ　実践校としての期間が終わりを迎えることから

新聞財団が行った「実践終了校に対する調査報告（2009 年）」では，2003 年度の NIE 実践継続校（389 校の内，回答校は 237 校）に対し，現在も NIE を継続しているか否か，NIE が定着した要因，定着しなかった理由などを聞いた。4 割弱（38.8%）が次の年も NIE を継続している。校種別では高校（45.7%）が最も多く，中学校（39.5%），小学校（29.8%）と続いた。つまり，小学校の 7 割強の実践校が終了すると共に NIE を継続していない。本校は来年度以降も継続していくため，NIE の研究を深められる環境づくりが必要である。

エ　昨年度の課題から　　※【　】内は項目 3 の仮説の番号

（ア）NIE を職員や子どもにとって身近なものにするハードとソフト面の工夫が必要だ。【1】

（イ）教材研究の時間短縮を目指すため，ハードとソフト面の工夫が必要だ。【1】

（ウ）NIE によって学力がついたことを証明する方法を考える必要がある。【2】

（エ）新聞を使った学習での系統性をさらに明確にする。【1・2】

（オ）子どもたちが今以上に主体的に新聞にふれられる環境づくりを目指す。【3】

（カ）ファミリーフォーカスの頻度や成果について検証が必要だ。【4】

（キ）保護者の関わりをより高めたり，温度差をなくしたりする取組が必要だ。【4】

1　研究の仮説と内容

| 【仮説 1】<br>学校組織の取組と工夫 | 【仮説 2】<br>学級の取組と工夫 | 【仮説 3】<br>環境整備と掲示の工夫 | 【仮説 4】<br>家庭との連携 |
|---|---|---|---|
| （1）教育課程の位置付<br>（2）実践例<br>（朝の活動：NIE タイム） | （1）国語科の授業<br>（2）社会科の授業<br>（3）作品投稿<br>（4）NIE 問題の取組 | （1）新聞の掲示<br>（2）子どもたちの作品や蕨島に関する新聞記事の掲示 | （1）家庭学習<br>（2）ファミリーフォーカス<br>（3）学級・学校 PTA<br>（4）よむのび教室 |

## 4　研究の実際

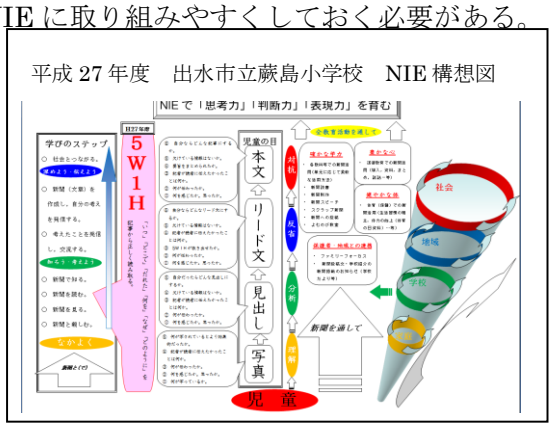
### 【仮説 1】学校組織の取組と工夫

#### (1) 全体計画や構造図，単元配列表のカリキュラム位置付

**【全体計画】**

課題設定理由④にあるように実践校が終了する本校にとって，教育課程に位置付けることは重要である。教師の異動に左右されず，組織として NIE に取り組みやすくしておく必要がある。

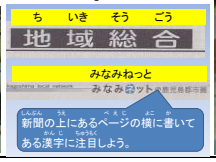
**【構想図】**




同僚教師に NIE をどのような目的でどのように実践していくかを一目で分かるように工夫して，全教育活動と NIE の取組とをつなげる目的で作成した。学びのステップの隣に昨年度末時点で考えられた NIE の系統的な学習内容や方法を「写真」，「見出し」，「リード文」，「本文」の項目ごとに具体的に示し，情報論理の「理解」，「分析」，「反省」，「対抗」と並列させた。そうすることで，授業を組み立てる際に「身につけさせたい学力」を意識しやすくなった。つまり，教材研究の際に教師が目的を明確にもてるようになったといえる。そこで，全体計画と同様に，各教科・単元の年間計画といっしょにファイリングすることにした。今年度からは，重点事項も取り入れ，朝の NIE 活動の核となる活動を記入した。朝の活動（NIE タイム）を全職員で割り振り，計画的に指導・検証するようにしたため，全員が構想図を見て，取り組めるような工夫が必要となった。組織として，NIE に取り組んでいくためには，担当教員だけではなく，全職員で取り組むことが重要である。共通理解を図るために有効な構想図に変える必要があった。

#### (2) 実践例（朝の活動：NIE タイム 5 月～12 月）今年度の朝の活動（2 学期までの 8 回）

| 日付<br>目的 | 内　　容 | 考　察 |
|---|---|---|
| 5／27<br>（水）<br>実態把握<br>＋<br>新聞記事を広げ，記事を探す。<br><br>意欲向上<br>知識技能<br><br>スクリーンで提示 | ○　新聞アンケートをとった。<br>①　家庭で新聞をとっている。（14 人／17 人）<br>【南日本】14 人　その他なし<br>①-2　とっていない。（3 人）<br>②　新聞を毎日読んでいる。（10 人）<br>③　新聞を毎日さわる。（13 人）<br>④　新聞を毎日目にする。（15 人）<br>⑤　新聞に対するイメージは？<br>○　共通のキーワードを設定して，学年ごとにめあてをもたせて記事を選ばせ，発表させた。<br>本時のキーワードは「花」<br> | ○　NIE 実践校 4 年目になり，12 家庭中 10 家庭が新聞をとるようになった。<br>また，とっていない家庭も祖父母の家と連携して，読んだり取り寄せたりはしているようだった。<br>○　毎日新聞を掲示しているが，気づいていない子どもが 4 人もいた。<br>○　下学年が上学年のめあても達成しようと考えたり，先生に聞いたりする姿が見られた。条件に合った記事を見つけ，発表できた。 |

| | | |
|---|---|---|
| 6／3（水）<br>新聞記事を広げ，記事を探す。<br>＋<br>紙面紹介<br>知識技能<br>意欲向上 | ○　前回同様に，共通のキーワードを設定して，学年ごとにめあてをもたせて記事を選ばせ，発表させる。本時のキーワードは「小学校」<br>○　自分の写真やコメントが載っていることを知り，関心を高めている姿が見られた。「新聞を読んでみよう。」「新聞を読もう。」という意欲を口にする子どもが多かった。<br> <br>  <br> | ○　前回の活動で子どもたちが，新聞を広げ，記事を見つけることができていることが分かった。今回は，蕨島小学校が取り上げられた記事をもとに，「地域総合欄」を教え，新聞を広げたり，読んだりする意欲付を図った。<br>○　効果があった。 |
| 7／1（水）<br>新聞記事を広げ，記事を探す。<br>知識技能<br>思考判断 | ○　1学期最後のNIEタイムは，南日本新聞社の「ミナミさんちのクイズ」に答える（答えを新聞から見つける。）活動を行った。<br>○　子どもたちは，答えを探しながらたくさんの記事にふれ，「先生，蕨島小が載っているよ。」「この記事，読んだよ。」と話しながら，新聞をめくった。<br>○　高学年には，答えの理由まで考えさせた。 | ○　どの学年も意欲的に新聞を広げ，答えを探していた。<br>○　クイズについて考えることで，思考力や他教科との関連を図り，基礎基本の定着を図ることにもつなげることができた。 |
| 9／16(水)<br>～<br>11／4(水)<br>4回<br>5W1Hの読み取り | ○　子どもたちが一番関心のある記事を選ばせた。<br>○　5W1Hの読み取り方を実際の記事をスクリーンで映し出し，一斉指導した。<br>○　3回目（10／21）に自分が選んだ記事の5W1Hを読み取る時間を設定した。<br>○　4回目（11／4）に発表する時間を設定した。 | ○　低学年の子どもも意欲的に取り組んだが，難しい。<br>○　「どのように」は，読み方や問い方によって変わってくるため，具体的な問いがなければ答えにくい。 |

**【仮説2】学級の取組と工夫**

**(1) 国語科の授業（高・中学年）**

5年生「新聞を読もう」，6年生「まちのよさを伝えるパンフレットを作ろう」の単元を研究授業として公開した。5年生は，昨年と同単元の内容で行い，口永良部の噴火を報じた全国紙と地方紙の違いを読み取らせた。6年生はパンフレットの構成を考えさせ，新聞の構成を生かせば，伝わりやすいことに気付かせた。昨年の授業経験から，5年生にアドバイスをする様子があった。連続性が生き，複式学級のメリットが出た。子どもたちの発表やワークシートの内容などを見ると，両学年とも指導者のねらいを概ね達成できたと言える。

中学年は，年間を通して国語科で新聞を生かした授業を行ってきた。「言語についての知識・理解・技能」に関する内容は，新聞を生かしてきた。また，大単元の「書く」学習では，制限字数内で伝えたいことを伝えるには，新聞記事の書き方が生かせる。また，多数の意見を読んで考えたり，読み比べたりする際にも新聞記事や投稿欄が生きる。授業と新聞を密接に関連付けることで，子どもたちの読む力や書く力につながったと考えている。

**(2) 社会科の授業（中学年）**

中学年の社会科の学習で，実践校としての取組の一つの成果として「新聞形式」でまとめることを目標に取り組んだ。毎時間の学習で調べる内容と「まとめ」，「まとめを見出しにする」ことをパソコンや電子黒板に用意して，子どもたちが迷わず新聞作りに取り組めるように学習

を進めた。また，レイアウトや構成を考えることは，中学年には難しくて，時間がかかることから，毎日新聞社の記者が作成したレイアウトをもとに作成することにした。研究授業当日は，目的を意識して，新聞記事にする３つの内容を選ばせ，見出しを書くところまでを計画していた。しかし，実際は子どもたちが戸惑ってしまい，予定したところまで進められなかった。１時間１時間のおさえが足りなかったことと，初めての経験だったことが原因だと考えられる。参観者からも，「中学年児童に多くを求め過ぎだ。」との意見が出た。NIE タイムでの実践を踏まえて取り組んだが，子どものレディネスと学習内容に差が出た結果となった。

**(3) 各教科等の学習や家庭学習での作文を投稿**

今年度の掲載数は，南日本新聞が６件，西日本新聞が４件，読売新聞が１件だった。

**(4) NIE 問題の取組**

担任する 3・4 年生の教室では，毎朝登校してすぐに，小学生新聞の記事を活用した問題を解いている。黒板に問題が書かれたホワイトボードを掲示し，子どもたちは新聞を読んで解決する。各教科につながる内容や社会的な事象など，日によって問題は変えたがたくさんの効果が得られた。知識を増やすだけではなく，答え方を学んだり，見方や考え方を広げたりすることにつながった。

問題を解く子ども

問題と新聞，答え

**【仮説 3】　環境整備と掲示の工夫**

**(1) 新聞の掲示**

**(2) 子どもたちの作品を含む新聞記事の掲示**

**【仮説 4】　家庭との連携**

**(1) 家庭学習（新聞ノート）**

**(2) ファミリーフォーカス　　(3) 学級・学校 PTA　　(4) よむのび教室**

**5　研究の成果と今後の課題**

| 仮説 | ○成果　●課題 |
|---|---|
| 1 | ○　全体計画や構想図，単元配列表を改善することで，授業実践につながった。<br>○　各教科と NIE の目標を別に設定することでねらいが明確になり，効果的だった。<br>○　来年度の NIE 教育活動につなげる活動や準備ができた。<br>●　NIE を職員や子どもにとって身近なものにするハードとソフト面の工夫が必要だ。 |
| 2 | ○　子どもたちの実態を捉え，実態に合った活動ができた。<br>○　教科等の目標や子どもの実態に応じた新聞教材の作成ができた。<br>○　複数の教職員や関係者に授業を見てもらうことで，成果や課題が明確になった。<br>○　子どもたちの学力向上につながった。（6 年生国語 B 問題正答率 75%）<br>●　教材研究の時間短縮を目指すため，ハードとソフト面の工夫が必要だ。 |
| 3 | ○　子どもが主体的に新聞を読み，文章を書くことにつながった。<br>●　教児共にさらに主体的に新聞にふれられる環境づくりが必要だ。 |
| 4 | ○　課題を克服したり，学力をつけたりすることができた。<br>○　保護者と子どもが同じ話題で話をするため，家族団欒の時間ができた。 |

**6　終わりに**

実践校として取り組んだ４年目の活動も，非常に充実した。最後に本研究にあたって，鹿児島大学や南日本新聞社，市教育委員会，多くの教職員の方々にたくさんの御指導や御尽力をいただいた。感謝するとともに実践を重ねることで恩返しをしたい。